

# ふるさと通信



基幹博物館外観パース

現在、実施設計が進行中ですが、現博物館が約3,500㎡

状況であり、移転新築が喫緊の課題となつてい

史跡内に立地することから、建替えはもとより増築も難しい

の名称は消滅し、松本市立博物館に。本年で丸51年を迎え、建物や設備の老朽化が目立ち、展示スペース等の狭隘化も進んでい

## 来年 基幹博物館着工 高30回 守屋 千秋

現在、大名町通り沿いの三の丸・土井尻地籍に、広大な空間が生まれています。ここは、松本城二の丸にある松本市立博物館の移転先として、松本まるごと博物館構想の中核をなす基幹博物館の建設地として確保されたものです。もともと、大手門駐車場の平面駐車場が一定の空間を成していましたが、立体駐車場の北棟が取り壊され、通り沿いにあるたビルも解体されたことで、この空間となりました。

現博物館は、国史跡松本城内の南東の角に建設され、昭和43年にオープン。当初は「日本民俗資料館」の名称でしたが、いつの間にかこの名称は消滅し、松本市立博物館に。本年で丸51年を迎え、建物や設備の老朽化が目立ち、展示スペース等の狭隘化も進んでい



内観（エントランス）

（延床面積）であるのに対し、基幹博物館はその倍の7,000㎡、8,000㎡規模とのこと。かつて城内の武家屋敷であった敷地に建つということから、地域の歴史を踏まえた切妻屋根のデザインとなっています。

来々、令和2年（2020年）に着工。令和5年（2023年）には「松本学を探究し、松本の未来を創造する博物館」がオープンする予定です。

松本城の入口に新たに施設が加わり、大勢の市民や観光客が集い、交流が広がることで、さらなる賑わいが期待されます。基幹博物館建設事業に当初から関わっている松本市教育委員会の堀井亮彦君（高55回）は、「博物館という過去のことだけを学ぶ場と思われがちだが、そのイメージを変え、松本の現在や未来も考える場になるような博物館にしていきたい」と述べています。

そして、オープン後に現博物館の取壊しも始まれば、南・西外堀復元事業の進行とも相まって、北アルプスを背景にした松本城の景観がさらに雄大なものになると、こちらにも期待が膨らみます。



## 寄付金付きノート 『松本城学習帳』で松本城に貢献！ 高43回 小澤 英俊



松本市のシンボル、松本城。昨今では海外からの観光客も増加の一途であり、建てられた当初の形を今に留める数少ない現存天守、かつ国宝ということですが、私が思うに、その価値は住民の手で守られてきたお城の歴史、松本市の市民性にもあるのではないのでしょうか。

深い伝説などを掲載。詳細な情報を載せることでノートでありながらお城のパンフレットの役割を持たせました。このノートの特徴は、購入でお城に寄付ができるほか、「買って終わりではない」とい

明治から続いてきた天守保存活動の火を点し続ける。またインバウンドへの対応として説明文の一部は英語と日本語の並列表記も試みました。2018年4月末に発売を開始し、ようやく1年が経過して、多くのメディアに紹介いただきました。お蔭で幅広い年齢層からお問い合わせをいただき、現在、松本城内の売店ほか、市内の博物館（松本市立博物館、旧開智学校、時計博物館、はかり資料館、大名町「信州土産処たかぎ」）で好評販売していますが、まだまだ小さな一歩ですが、多くの人が参画できるような永続的活動を今後も目指したいと考えています。



『松本城学習帳』は、そんな松本市民の気質を形にできないかと思ひ、有志で企画製作を始めました。1冊につき10円がお城へ寄付されるオリジナル商品で、表紙裏には松本城の年間イベントや特徴、味

う点です。対外的には「小さな観光大使」として松本城の魅力アピールし、リーダーや新規来城者を誘客する。そして地元においては、松本城の価値を市民、特に子ども達に再認識してもらおうこと

で興味や関心がある方はフェイスブックにて活動報告を随時していますので、ぜひご覧ください。

